

カタブツ上司の溺愛本能

背中の中の真ん中まである長い栗色の髪は、日に透けるとキラキラする。

『珠海ちゃんなまみの髪は本当に綺麗ねえ。お人形さんみたい』

子供の頃から幾度となく褒められた髪を、ブラッシングしながらきっちり一つ結びにする。メイクはナチュラルに。唇に近い自然な色味のリップをのせたら準備完了。仕上げにシルバーフレームの眼鏡をかけたら、いつもの私ができあがる。

——はいできたー。よし、行くか……

自分の部屋がある二階から勢いよく階段を下りると、一階の居間から祖母の声が飛んできた。

「これ、そんなに慌てて下りなくても……落ちたらどうするの」

「大丈夫よ。それより、もう時間だから行くね。今日もお弁当ありがとう、おばあちゃん」

「はいはい、行ってらっしゃい」

キッチンに寄ってお弁当の入ったバッグを通勤用のバッグに入れると、私は慌ただしく玄関を出た。

母の実家である一戸建てで祖母と母と暮らす私——漆瀬珠海、二十八歳。

子供の頃両親が離婚し、母に引き取られた私は以来ずっとこの家で暮らしている。

母は現役の高校教師で、私も就職し正社員として働いているため、お弁当はいつも料理好きの祖母が作ってくれている。本当ならあんまり甘えるべきではないのかもしれない。でも、祖母がこれくらいやらないと生活に張り合いがないと言ってくれるので、ありがたくお願いしている。

——料理上手な祖母がいるって素晴らしい……作ってくれるだけでもありがたいのに、すっごく美味^{おいしい}いから、ついつい甘えちゃうんだよね……

それは私だけでなく母もなのだが。母は、毎朝祖母に「その年でいまだにお弁当を作ってもらってるなんて、恥ずかしいから周りには言わないように」と念を押されていた。

家の近くの停留所からバスに乗り、勤務先に向かう。

閑静な住宅街の近くに建つ真つ白い大きな建物。ここが私の勤務先である生活雑貨を製造するメーカーの本社だ。

創業が古く歴史のある我が社は、国内では大手と言われており、キッチン雑貨からバスグッズまで様々な商品の開発と製造を行っている。私は新卒でこの会社に入社してから、ずっと総務部に勤務していた。

社屋のエントランスから総合受付を通り抜け、バッグの中に入れていた社員証をセキュリティゲートにかざそうとする。しかし手が滑って、社員証を落としてしまった。

「あ」

——いつけない……

腰^{かた}を屈めて拾おうとしたら、ちょうど近くを通りかかった人が先に社員証を拾ってくれた。

「どうぞ」

そう言っ、私に社員証を差し出してくれた男性の顔は、私の目線よりだいぶ上にあつた。

仕立ての良さそうなグレーのスーツを着ているのは、私と同じシルバークレームの眼鏡が印象的な男性。しかも綺麗に整えられた清潔感のある短髪その顔は、恐ろしく整っており、目が合っただけでそのマスクに釘付けになってしまうほど。

普段、あまり人の顔をまじまじと見ることがない私にしては、珍しいことだった。

「あ……ありがとうございます」

——すごいイケメン……こんな人、うちの会社にいたっけ？

疑問に思いながらお礼を言うと、男性はすぐにセキュリティゲートを通り抜けて、エレベーターがある方へ消えた。

——やっぱうちの社員か……でも、どこの部署の人だろう？

そんなことを思いつつゲートを通り抜けた私は、三階にある自分の部署へ向かったのだった。

この会社の体制は、以前は創業と同じでかなり古く、完全な年功序列制だったらしい。でも数年前に社長が代替わりしたのを機に成果主義が取り入れられるようになり、旧態依然^{きゅうたいいぜん}とした社風から時代に合った社風へと変化してきている。

——それにその時、女性社員の制服も廃止になったのよね。毎日スカートとかちよつと嫌だった

し、ほんとよかった。

部署に到着して、すでに入社していた先輩社員と挨拶を交わす。

「漆瀬さん、今日もお祖母様のお弁当？」

「はい。今日は筑前煮がメインですって」

三年先輩の女性社員である向井香さんむかいかおりと話しながら席に着く。彼女は既婚者で、旦那様もこの会社勤務している。つまり、社内恋愛で結婚したことになる。

身長が百六十七センチある私と並ぶと、向井さんは十センチ近く低い。華奢かしゃで顔立ちの可愛らしい向井さんは、私の憧れである。

——私も向井さんくらいの身長がよかったなあ……。旦那さんと並んだ時の身長差に萌えるのよね……

ヒールを履いたら百七十センチを超える私からすると、夢である。

大概の男性は、私と視線がほぼ一緒かそれよりも低い。まれに見上げるような長身の男性もいるが、私の周りにはほとんどいなかった。

「それにしても、ほんといつ見ても見事な栗色の髪ねえ……たまには下ろしてくれば？」

近づいてきた向井さんが、私の背後に回る。

「いえ、下ろすと仕事の邪魔になるので。それに、昔から髪を下ろすとどうも目立つみたいで」

間髪かんぱを容れずに返すと、向井さんが苦笑する。

「そうかなあ……そんなことないと思うけど。今ってカラーリングする子の方が多いんだから、そ

んなに気にならないわよ。っていうか、漆瀬さんは綺麗だから目立つのよ。そんな眼鏡したって美しさは隠せないわよ」

向井さんの言葉に、つい彼女から目を逸らした。

「眼鏡は……無いと見えますし」

「ほら、口を尖らせない。まあ、そんな顔も可愛いんだけどね。でも、どうしたってお父様の血は誤魔化せないわよ。肌だつて透き通るように白いし、顔もちーっちゃいもん」

向井さんが私の頭をなでなでする。

「誤魔化しているわけではないんですが……」

「最近は何とかされてないんでしょう？ だったら、別にそこまで気にしなくていいのに」

「それは、そうなんですけど……」

なかなか答えにくいことだったので、もごもごとした返事になってしまふ。

「ま、でも漆瀬さんなりに自衛してるのよね。そうしないと、良くも悪くもいろんな人が寄って来ちゃうから」

それに対する答えが上手く思いつかなくて、苦笑いで返した。

——そう。確かに私には、良くも悪くもいろんな人が近づいてくる。

向井さんの言う私の実の父は、外国籍の人だった。

私と同じ明るい栗色の髪を持つ父と、母は同じ高校に勤務している時に出会い結婚し、私が生まれたのだ。

そのまま穏やかで幸せな家庭を築く……と思いきや、父の母が病に倒れたことをきっかけに状況が変わった。母国に帰りたい父と、祖父を亡くしたばかりの祖母を置いていけない母の意見が対立。話し合いの結果、離婚を選択した父は母国に帰国してしまったのだ。

『でも別にお互いが嫌いになって別れたわけじゃないわよ。ちゃんと養育費ももらってるしね』

母の言う通り、年に一度はこちらが会いに行くか、向こうが来るかで父に会っていたし、たまに電話で会話もする。だから父がいなくてさみしいと思ったことはない。

ただ一つ、問題があったとすれば、子供の頃の私の外見は、今よりも父の要素が色濃く出ていたということだ。

髪は金髪に近かったし、肌の色も周囲から浮くくらい白かった。

明らかに周囲から浮いていた私は、簡単に言うとはよくからかわれた。

ありがたいことに、いつも近くにいる友人が助けてくれたから、そこまで大きなトラウマがあるわけじゃないけど、好きだった男の子に外見をからかわれたのはショックだった。顔が小さく、手足が長いことで宇宙人みたいだと言われて、ものすごく落ち込んだし悲しかった。

それから約二十年。何度も外見を理由にやっかまれたり、目の敵にされたりした。そんな経験から、いつの間にか私は、内向的な性格になり、必要以上に人と関わらないようになった。

——でも、気になる人がいなかったわけじゃないのよね……

大学生の時は教授に淡い恋心のような、憧れのような気持ちを抱いていたし、社会人になってからは、この会社の当時の副社長を素敵だと思っていた。

みんな私よりも三十歳くらい年上だった。

今思えば、あれは恋愛の好きじゃなくて、なかなか会えない父の面影を重ねていただけだったと分かる。

もちろん、同年代の男性とも、外見を気にせず仲良くなることは何度もあった。しかし、友人だと思っている相手から、友人以上の感情を向けられたり、その男性に恋するまったく付き合いのない女性から敵意を向けられたりなどの、トラブルに巻き込まれること多数。

私が悪いことをしたわけじゃないのに、何故罵声を浴びせられたり、白い目で見られたりするの。

——恋愛って、面倒だ……

理不尽な目には遭いたくない。だったら、最初からそういうことに関わらない方が気も楽だ。

そういう考えに行き着いた結果、いまだにお付き合いの経験もないし、結婚のけの字も見えてこない日々を送っている。

でも、母も祖母も何も言わないので、今のままで構わないと思っていた。

——仕事もあるし、少ないけどなんでも話せる友人だっている。今のままでも特に不満はない。しかし、そんな私の平穏な日々は、もうすぐガラガラと音を立てて崩れることになるのだ。

「あの」

他の部署に向かうため廊下を歩いていると、背後から声をかけられた……ような気がした。

——私？

左右を見回すが他に該当する人はいない。というわけで振り返ると、若い男性社員が立っていた。実際の年齢は分からないが、ぱつとみた感じだと私よりも若い気がする。

「はい……………」

書類の束を胸に抱えながら、男性と視線を合わせた。私の顔を見るなり、その男性が驚いたように目を見開き距離を詰めてくる。

「うわ……………！ 突然すみません！ あまりにもお綺麗なので、驚いて思わず声かけちゃいました」「は!？」

——いきなり何……………？

間違いないうちの社員のはず。だけど、首から提げている社員証に記された名前に見覚えはない。何より今は、気がついたら至近距離に来ている男性に腰が引けて、それどころではなかった。

「あ……………あの……………」

「総務の漆瀬さん……………漆瀬さん!? あなたが噂の……………!! あ、自己紹介が遅れました。俺、上松洋……………っています。つい最近異動で本社勤務になったんです」

——……………ていうか、噂って何……………？

そう言われて再び胸元の社員証を確認すると、企画開発部と記されている。他部署の男性と私的な交流がほぼない私が、異動してきたばかりの男性社員を知るわけがなかった。

警戒は解かず、とりあえず怪しい人ではないことが分かり、ひとまずホツとする。

「ああ、そうだったんですね。総務部の漆瀬珠海です。よろしくおね……………」

「こちらこそよろしくお願いします。できればもっと親交を深めたいので、SNSなど……………」

私の挨拶を最後まで聞くことなく、ごそごとストラックスのポケットからスマホを取り出そうとした上松さんに目を剥いた。

——なっ……………無理!!

初対面の人といきなりそういうやりとりなんか、いまだかつてしたことがない。

青ざめながら、私はぶるぶると首を横に振り、彼から一歩後ずさる。

「ごめんなさい！ 私、そういったことはちよつと……………急ぎますので、失礼します」

「え?」

上松さんに勢いよく頭を下げ、そのまま彼を見ずにこの場を後にした。背後から「ありや……………」という声が聞こえてきたけど、振り向くことはできなかった。

——びっくりした……………初対面でいきなりあんなこと言ってくる人がいるなんて……………

気が動転しつつ届け物を終えた私は、昼休みにさっきの出来事を向井さんに話した。

「上松洋? ああ、最近企画開発部に来た人でしょう? ちよつと前に本社に来るって噂になったよ」

向井さんと斜めに向かい合ってお弁当を食べていた私は、彼女の言葉にピクツとした。

「噂……………? 噂って、なんですか?」

「まだ入社して三年かそこらなのに、すごいアイデアをいくつも出すアイデアマンなんだって。お

まけに顔が可愛いとくれば、女子が黙ってないよね。異動が決まった頃から、企画開発部の女子がざわついてたもん」

「へえ……そうなんですか」

——やっぱり私よりも若い人だったか。それにしてもそんなすごい人だったなんて……正直まったくいい印象は持たなかった。

真顔で話を聞いていたら、いきなり向井さんがふふっ、と笑い声を漏らす。

「しっかし……まだ異動してきて間もないのに、もう漆瀬さんを見つけちゃうなんてすごいわね」

私は、複雑な気持ちでお弁当に視線を落とす。

「仕事ぶりは問題なさそうだし、話して素敵な人だったら連絡先を教えてもいいんじゃない？」

それに対して、私は素早く首を横に振った。

「……仕事ができるできないは関係ないんです。私、ああいう、ぐいぐい来る感じの人、苦手なんです……」

どんなに仕事ができようが顔が可愛かろうが、上松さんみたいなタイプは私が最も苦手とする男性なのだ。できることなら、もう二度と顔を合わせたくない。

「そっかー。でも、そういう相手に限って、意外に顔を合わせることが多かったりするのよね。漆瀬さん、頑張れ？」

哀れむような視線を送ってくる向井さんに、心の底から勘弁してくださいと思う。だけど、残念ながら彼女の予言はこの後、見事に的中することになるのだった。

上松さんとの衝撃的な出会いの翌日。

あろうことか出勤した途端、エレベーターの前で本人にばったり遭遇してしまった。

「漆瀬さん!! おはようございます!!」

いきなり声をかけられ、まさかとそちらを見れば、満面の笑みを浮かべる上松さんがいた。

「……!! お、おはよう、ございます……」

ぎこちない返事をした私がすぐ正面を向くと、上松さんが私のすぐ横に立つ。

「いやー、まさか朝から漆瀬さんに会えるなんて、今日はいい日だなー。いつもこの時間に出勤ですか？」

「……は、はい……」

「そうなんです。じゃあ、俺もこれからはこの時間に出勤するようにしようかな。そうすれば漆瀬さんに会える確率が上がりますもんね？」

「……!?!」

絶対今の私は、ものすごく嫌そうな顔をしているという自信がある。よって慌てて上松さんから顔を逸らした。でも、上松さんはそんな私の表情など全然気がついていないらしい。

「何度か顔を合わせているうちに、自然と仲良くなってるかもしれないもんねー」

私に構わず勝手なことを言っている。この人、仕事はできるかもしれないけど、女性の気持ちに鈍感、もしくは自分の都合のいいようにしか捉え^{とら}えないタイプ、かもしれない。

——嫌だなあ……本当に、こういう人苦手だ……

「上松」

胸にモヤモヤが生まれるのとはほぼ同じくして、私達の真後ろから声がかかった。

私と上松さんが同時に振り返ると、背の高い男性が立っている。その顔には見覚えがあった。

——あれ？ この人……

「齋賀さん、おはようございます」

昨日の朝、私が落とした社員証を拾ってくれた人だと思い出した時、上松さんが男性の名を呼んだ。

昨日と同じ、シルバーフレームの眼鏡の奥にあるのは、涼しげな目元。だけど、昨日よりもその表情が険しいような気がした。

「おはよう。上松、話があるから階段で行くぞ」

齋賀さんと呼ばれた男性が、エレベーターホールの向こうにある階段に視線を送った。それを見て、上松さんが「あつ」と声を上げる。

「分かりました。じゃ、漆瀬さんまた」

「はい……」

上松さんに返事をして何気なく齋賀さんに視線を移す。彼は、私に軽く会釈をしてから上松さん連れて階段へ向かった。

——助かったあ……

二人の背中を見送った後、私は胸を撫で下ろす。

それにしても上松さんには困った。今回は運良く助けてもらえたけど、これからこういうことが起こった場合、どうやって回避したらいいのだろう。

どんよりした気分ですべて到着したら、すぐに向井さんが近づいてきた。

「おはよう漆瀬さん。ねえ、さつき下で上松さんに声かけられてなかった？ ちょうど一階の倉庫の辺りにいたら上松さんの元気な声が聞こえてただけ……」

大丈夫？ と神妙な顔をする向井さんに挨拶をした私は、その時の状況を説明した。

「エレベーター付近で上松さんに話しかけられて困ってたんですけど、すぐに部署の上司らしき方に連れて行かれました。確か、齋賀さんという……」

「あー、齋賀さん。あの人も今年の春から本社勤務になったよね」

うんうんと頷く向井さんに、齋賀さん知らなかった私は呆気にとられる。

「向井さん、齋賀さんのことご存じなんですか……」

総務に勤務しているくせに、社員の顔と名前があまり一致しない私とは大違いで、少し凹んだ。そんな私を見て、向井さんが咄嗟にフォローしてくれた。

「あー、いやいや、齋賀さんに関しては私の夫が以前、同じ部署だったから知ってたの。確か九州からこつちに戻ってきたって言ってたかな？ 前は営業マンだったんだけど、数年前企画に異動になったらめきめきヒット商品開発して、今じゃまだ若いのに課長職に就いているって……上松さんみたいに才能ある人らしいよ。でも、性格は正反対みたいだけ」

「……正反対？ つてことは……」

「大人しいっていうか、気難しいタイプの人らしいよ、斎賀さん。ものすごく気心の知れた人数人とか話さないし、飲み会にもほとんど参加しないって聞いた。超社交的で誰とでもすぐ仲良くなっちゃう上松君とは全然違うみたい」

斎賀さんの話を聞いて、すぐに誰かみたいだと思った。

——私にそっくりだ。

「なんか……親近感が湧きます……」

思わず口にしたら、向井さんが「ああ！」と笑顔になる。

「確かに似てるわね。二人ともルックスがいい、つてどこも一緒だし」

「そ……んなことはないです……アッ……！」

驚きのあまり、囁んだ。

向井さんが不意を突かれたとばかりにブツ！ と噴き出す。

「……っ、やだもう……その可愛い顔で可笑しいことされるとギャップにやられる……」

苦しそうに体を震わせる向井さんに慌てて謝った。

「す、すみません……でも、斎賀さんて優しい方なのに、ちよつと意外ですね」

「え、そう？ 優しいかどうかはよく分かんないのよね。あんまり噂がなくて」

目尻にたまった涙を拭いながら、向井さんが苦笑した。

「そう……なんですか……」

——確かに社員証を拾ってくれただけで優しいって決めつけるのは、おかしいか……

それで冷静さを取り戻した。今は斎賀さんではなく、上松さんのことを考えるべきなのではないか。そう思ったのは私だけではなかった。

「まー、話を聞いている限り、上松さん、漆瀬さんが嫌がっているのに全然気がついてないでしょう。絶対これからもグイグイ来るわね。覚悟しておいた方がいいわよ」

「そんな……ど、どうしたらいいでしょうか」

「どうしたらってねえ……これも人生だと思って、敢えて荒波に揉まれてみるっていうのもアリかもよ」

「荒波じゃ溺れちゃいますよ……」

がっくり項垂れる私だったのだが、やっぱり向井さんの言うことは当たるのだ。

毎朝遭遇することは免れても、上松さんは何かと理由をつけて総務にやって来るようになった。

「漆瀬さん。この書類お願いしていいですか」

にこにこ微笑みながら私に書類を差し出して来る。それを上目遣いで窺いながら、書類を受け取った。

「……はい、不備ありませんので、このままお預かりします。ご苦労様でした」

私が書類を手に会釈すると、上松さんが困り顔になる。

「ええ、もう終わりですか？ もうちょつと漆瀬さんの綺麗な顔を見ていたかったのに」

「上松さんはお忙しいのでしょうか？ どうぞお仕事にお戻りください」

「うーん、忙しいといえば忙しいけど、それとこれとは別つていうか……」
「ご苦労様でした」

笑顔は崩さず、やや強めの口調で言う、彼は渋々自分の部署に帰っていった。

——ふう……やれやれだわ。

「漆瀬さん」

書類を手に自分の席に戻ろうとすると、すれ違いざまに同じ部署の上司に呼び止められた。

私よりも少し目線が下くらい身の長に、ややぼつちやり体型の諫山香屋子さんは私の五年先輩で、今は係長の役職に就いている。

私は、この人が少しだけ苦手だ。

「はい」

返事をする、諫山さんは無表情で私を窺めた。

「まだ本社に異動になって間もない上松さんに対して、あの態度はあまりよくないと思いますよ。同じ会社に勤務する社員同士なのだから、もっと親切な対応を心がけてください」

「はい、申し訳ありませんでした……」

確かに、仕事に私的な感情は出すべきではなかった。それは、素直に反省する。

しかし謝る私を見た諫山さんが「フン」と鼻を鳴らし私を睨み付けた。

「モテるからって、あまり調子に乗らないでね」

……

こういったことはこれまで何度もあった。でも、やっぱりいつもと同じように体が強張る。

そんな私を一瞥して、諫山さんは自分の席に戻っていった。

それを横目で見つつ、私も自分の席に着いた。

普段はそこまで風当たりはきつくないのだが、たまに諫山さんから鋭い視線を感じることもある。たぶん、私のことをあまりよく思っていないのだろう。

——はあ……もうやだ……

自分の席で、誰も見ていないことを確認してから、思いつきり項垂れた。

——ここところは落ち着いていたのに……

入社したばかりの頃。早く会社に馴染みたいからと、頑張って明るく振る舞っていた時がある。

でもそれが、周囲の女性社員と上手くいかない原因となってしまった。

いろいろあった結果、今はなるべく感情を表に出さず、人と接する時も当たり障りなくしている。常に地味が目立たないことを徹底してきたおかげで、以前ほど周囲から反感は買わなくなった。

『あの、会社に男漁りに来てるのかしら』

『地味にしても綺麗な人は得よね』

今まで言われてきたことを思い出したらきりが無い。同期入社の女性社員とも反りが合わなくて、誰とも仲良くなれなかった。

私を除いた女性社員だけで仲良くしているのを見るのは、とても辛かった。

——調子に乗ったことなんか、一度だってないのに……

でも、運良くというかなんというか、そのうちの何人かはすでに結婚して退社してるし、異動で地方の支社に行った人もいる。今は同期の女性で本社に残っているのは私だけになった。

陰口は同期以外の人にも言われるけど、それをいちいち覚えてたら精神がもたないので、聞いてもすぐに忘れるようにしている。しかし、久しぶりにああいうことを言われると、どうしたってやるせないなる。

そういうのが嫌だから、目立たないように地味にして、極力人と関わらないようにしているのに。——いつそのこと髪を短く切って刈り上げとかにしてみる……？ そうすれば印象変わるかな。どんなに凹んでも、淡々と毎日を過ごすしかないと分かっている。今までだってそうだった。——上松さんには、次に会ったらはつきり言おう。申し訳ないけど、迷惑なのでやめてほしいって……

少し気持ちが上向いたところで、私は仕事を再開した。

だけど、そんな私を知ってか知らずか、上松さんは想像以上に厄介だった。

お昼休みに私が自分の席でお弁当を食べようとしていると、いきなりうちの部署に上松さんが現れた。

「漆瀬さん!! よかつたらお昼、一緒に食べませんか」

彼の手にはどこかで買ってきたとみられる、お弁当の入った袋が提げられている。

いきなり現れた上松さんにもすごく驚いたのと同時に、今日は向井さんがお休みなので一人でお弁当を食べる予定だった私は、タイミンクの悪さに青ざめた。

「……あの、ご、ごめんなさい私、今日は、ちょっと……」

「え？ でも、デスクにお弁当箱広げますよね。そこで食べるんじゃないんですか」

「そうですけど、上松さんと二人で食べるのは……」

「なんですか？」

けろりとした顔で聞かれて、本当にもう勘弁してください、という心境で項垂れた。

「すぐそこに部長もおりますので……」

私が少し離れた席で黙々とお弁当を食べている部長に視線をやると、私達のやりとりに気がついた五十代後半のロマンスグレーな部長が、困ったように笑っていた。

「上松君……元気なのはいいことだけど、困っている女性を無理矢理誘うのはあまり好ましくないなあ」

さすがに部長にそう言われると、上松さんもマズいという顔をする。

「す、すみません。じゃあ……次はちゃんと承諾をもらってから来ますね。漆瀬さん、すみませんでした」

「はい……」

部長の機転でどうにかこの場を回避することができた。そのことにホッとした私は、すぐに部長へお礼を言った。

「お昼時に騒がしくしてしまって、申し訳ありませんでした」

「いや、いいんだけどね。でも、そろそろ上松君にはつきり迷惑だと言ってたら？ あの子、絶対

漆瀬さんが困っていることに気がついてないよ」

「……そうですね……はい、そうします……」

「なかなか大変そうだけど、頑張つて」

部長はそう言つて微笑むと、愛妻弁当に再び箸を付けた。

この部署に配属になった時から、ずっと私の上司である部長は、たまに私が困ったことになっているとそつと助け船を出してくれる。そんな部長に、いつも本当に感謝していた。

でも、部長が言う通り、本当に早くどうかしなくては。

昔、散々嫌な思いをした陰口の数々を思い出すと気が重い。頼むからそつとしておいてほしいという気持ちは、どうやったら彼に伝わるのだろうか。

ぐるぐる考えながら仕事を終えた私だが、なんと上松さんが帰り支度を済ませた格好でエントランスに立っているのを見つけてしまった。

それを見た瞬間、真つ先に嫌だな、と思つてしまふ。

——どうしよう……でも、言わないと……

躊躇ちゆうちゆうしつつも、私は意を決して彼の元へ歩み寄つた。

「あの、上松さん……」

「あ！ 漆瀬さん！」

私を見るなり嬉しそうな顔をする上松さんに、胸がモヤつく。

「お疲れ様です。今日は早いですね、もうお帰りですか」

「はい。実は今日、俺の歓迎会を開いてくれることになっていました。うちの部署の社員は、全員強制参加なんですよ。なんつって、嘘です。任意です」

「そうでしたか……」

やっぱりこんなこと言いたくないな、という気持ちがまた湧き上がってくる。でも、今言つておかないと、また困ることになる。

「あの、上松さん。ずつと言おうと思つていたんですけど、今日の昼みたいなのは今後やめていただけませんか？ はつきり言つて、め……迷惑なんです。本当に申し訳ないのですが……」

「え。迷惑なんですか？ どういうところがでしょう」

まるでどのことを言われているか分からない、といった表情を浮かべる上松さんに、めまいがしそうになった。

——嘘でしょ。

「どういうところ……今日みたいなことですよ。申し訳ないんですけど、私、上松さんと、お仕事以外での個人的な交流は望んでおりませんので……」

ものすごく言いにくいことだけど仕方がない。気分を害するかもしれないけど、はつきり言わないとこの人にはきつと通じなさそうだったから。

なんとか気持ちを伝えた私に、上松さんが一瞬だけ目を泳がせた。

「それって、俺のことが嫌いってことですか？」

「へ？ ……いえ、別に嫌いではありませんけれど……」

実際苦手なのは本当だけど、嫌いとは断言できるほど、この人のことを知らない。

「よかった。じゃあまだ気持ちが変わる可能性はあるわけですね？」

そう言っつて、上松さんが私に一步近づいた。

「上松洋、二十六歳です。まだ漆瀬さんと知り合っつて日が浅いですが、あなたにひと目惚れしてしまいました。どうか俺とお付き合ひしてください！」

よろしくおねがいします！ と元気な声で手が差し伸べられる。ちなみに今は、仕事を終えた社員がポツポツ私達の横を抜けてエントランスから外に出て行っつている状態だ。こんな場所ですごなことをされたら、すぐに告白されたことが社内中に広まっつてしまうかもしれない。

渋い顔をする諫山さんや、陰口をたたく女性社員のことが頭に浮かんだ。

——か……勘弁して……!!

周囲の目を気にしっつつ、私は彼に向かっつて思いつきり頭を下げた。

「ごめんなさい!! 私には無理です！」

「え……無理っつて、どこが……」

上松さんがこう言いながら眉をひそめた。その時、こちらに向かっつて歩いてきた男性社員が「おい、上松！」と彼に声をかけた。

「お前、主役なのに何やっつてんだ？ 早く行くぞ！」

「すみません。今行きます」

どうやら上松さんにとっつて先輩に当たる社員だっつたらしい。彼は動揺したように、何度か私とそ

の先輩社員に視線を送った。

「ん〜……今日はもう無理か……漆瀬さん、この件についてはまた日を改めて話しましょう。では、お先です」

「イヤちよっつと待っつて、改めるも何もお断りしたんですが」

「とりあえずそれも保留で！ じゃっつ」

爽やかな笑顔で去っつて行く上松さんの背中を、私はただ呆然と見つめることしかできない。

——保留っつて、何……!!

なんですんなり分かりました、と言っつてくれないのだろう。がっつくりと肩を落とし、とぼとぼと歩き出す。

この先のことを考えたらますます気が重くなっつてきた。

いつもなら真っつ直ぐ最寄りのバス停から帰宅するけど、今日はどこかに寄り道して帰りたい気分だっつた。

「……美味しいスイーツでも買っつて帰ろうかなあ……」

誰に言うわけでもなくぼそつと呟きながら、バス停とは反対にある商店街へ足を向けた時。ちょうど私の前を歩いていた男性が信号で立ち止まり、こちらを見た。

上松さんの上司の齋賀さんだ。

「……お疲れ様です」

会釈をすると、齋賀さんも「お疲れ様です」と挨拶を返してくれた。

まだ数回しか顔を合わせたことがない男性社員と、こういう自然なやりとりができたことを新鮮に思う。

ほんの少し、胸にポツと灯が点つたみたいな気持ちになった。

なんとなく距離をあげて一緒に信号待ちをする。無言なのは気まずいけれど、特に話すこともない。仕方なく自分のつま先に視線を落としていると、右斜め上から話しかけられた。

「上松のこと、大丈夫ですか？」

「えっ……？」

まさか斎賀さんからこの話題が出るとは思わず、弾かれたように彼を見上げる。

「どうして？ ……あ、もしかして、上松さんが何か言っていましたか」

「いえ、そうではなく……実は先ほど、上松があなたに告白していたのを目撃してしまいました」

言われた瞬間、羞恥で顔がカッ！ と熱くなった。

「……そう、でしたか。すみません……」

あんな公衆の面前で告白されたのだから、たまたま通りかかった斎賀さんが見ていたとしても不思議ではない。そう分かっているけど、やはり恥ずかしさで居たたまれない。

ここで赤だった信号が青に変わった。私も斎賀さんも反射的に歩き出す。

「上松は勤務態度や仕事に対する姿勢は問題ないのですが、どうも、あなたに関するものでは周りが見えなくなっているようですね。先ほどの件も、あんなに大勢の人が行き交う場所ですべきことではないのに」

「……やめてくださいってお願いしたんですけど、何故か……あまり通じてないみたいで」

斎賀さんに、つい本心が漏れる。

「私から上松に注意しましょうか」

不意にかけられた言葉に、斎賀さんを見上げる。横断歩道を渡り終え前を向いていた彼が、横目で私を捉える。

「え……」

「一応、上松の上司でもあるので」

そういえばと、この前、エレベーターの前で上松さんに会った時のことを思い出した。この人がいいタイミングで、上松さんを連れて行ってくれたんだった。

——そっか。上司である斎賀さんの言うことなら、上松さんも聞いてくれるかもしれない。

だけど、業務とはまったく関係ないところで、この人を頼ってもいいものか。それに、このことがきっかけで斎賀さんと上松さんの関係が悪くなったなら、仕事に支障が出るのでは……

となると、自ずと答えは決まってくる。

「いえ、大丈夫です。自分のことなので自分でなんとかしてみます」

人に頼る前に、まずは自分で行動してから。そう思ったので、気持ちだけありがたいだいて丁寧に申し出をお断りした。

「すみません、気を遣ってくださいったのに。でも、お気持ち嬉しかったです。ありがとうございますございました」

気持ちを含めて齋賀さんに頭を下げた。そんな私に、齋賀さんは静かに頷いてくれた。

「分かりました。それでももし、上松のことで困ったことがあったら、いつでも相談してください。では、私はここで失礼します」

「え」

隣を歩いていた齋賀さんが、ある店の前でピタリと立ち止まった。

「上松の歓迎会があるので、顔だけは出そうかと」

どうやら宴会が行われるのはビルの一階にある、小料理屋らしい。木製の引き戸の向こうからは人の話し声が微かに聞こえてくる。

「そうでしたか。では、私はこれで……お疲れ様でした」

「お疲れ様です」

どうやら私がこの場を去るまで、齋賀さんは小料理屋に入る気配がない。それを悟り、私は軽く会釈をして歩き出した。その後、背後からドアを開くカラカラという音が聞こえてきた。

少し気が抜けた状態のまま、私は最寄り駅にある商業ビルに向かった。そこに入っている洋菓子店で自分と家族が食べるケーキを買い、駅から出ているバスに乗って帰路に就いた。

ケーキを食べて気分を上げて、今度こそちゃんと上松さんに気持ちは受け入れられないとお断りしよう。

【困ったことがあったら、いつでも相談してください】

バスの窓から見える夜景をぼんやり見つめながら、私は齋賀さんが言ってくれた言葉を何度も思

い返していた。

二

私の想定以上に【エントランスでの告白】の話が社内に広がるのは早かった。

顔見知りの社員に遭遇する度に「上松君とどうなったの!？」と聞かれる始末。もちろん、その都度なんともなっていないと説明するが、相手の顔を見る限りでは、信じてくれたかどうかはいまいち分からない。

「最近、部署の外に出るのが怖くて仕方ないです……」

お弁当を食べながら、がつくりと項垂れる。

唯一気を許せる向井さんの前だけでは、本音を出すことができる。そんな私に、彼女も本気で同様の顔を見せた。

「ほんと、こういう情報って広まるのが早いよね……きつとみんな他人事だと思って面白がっているのよ。で、その上松さんはどうしたの？ あれから漆瀬さんのところに来た？」

「それが最近姿を見かけないんです。まあ、その方がこっちは気が楽でいいんですけど」

彼に会うことがないと、気持ちが恐ろしく楽だ。やはり自分は、改めてあの人が苦手なのだと思信した。

「あのね？ 本当にどうしようもなかったら、私が漆瀬さんの代わりに上松さんに言ってもいいのよ。」

向井さんの言葉がありがたくて、胸が温かくなった。本当に彼女はとても優しい先輩なのだ。「ありがとうございます……実はこの前、上松さんの上司の斎賀さんも、困ったら相談するようになって言ってくださったんです。だから、最悪の場合はお願いしようかなって思ってるんです」

「そうなの？ それならよかった！ ああ、そうだ。この前社内報の編集作業をしている時に思い出したんだけど、過去の社内報に斎賀さんの記事があつてね。ちよつと参考にしたいからつて、借りてきた。ほら」

向井さんがデスクの上に斎賀さんの載っているページを広げた。

それは、今から六年前の社内報で、当時営業部に所属していた斎賀さんが、写真付きでインタビューに答えていた。インタビュウと言っても、プライベートなことを聞かれて答えるようなものではなく、業務に関する取り組みや、今後の仕事の展望について語るといった類いのものだ。

六年前の斎賀さんの顔は、今とそんなに変わらない。ただ髪が少し短いくらい。もちろんシルバークレームの眼鏡も健在だ。

「六年前か……私、この号が出た時は、まだ入社して間もない頃で、研修だけでいっぱいだったから、社内報の内容なんか全然覚えていませんでした」

「まあ、そうよね。私もこの部署に異動になって間もなかったから、先輩に教えてもらいながらなんとか作業をこなしてたつて感じだったな。でも、この写真に見覚えはあるんだよね。あ、この人

かつこいい！ つて思つたから」

ふふつ、と当時のことを思い返ししながら、向井さんが微笑む。

「この頃の斎賀さんつて、すぐく女性から人気ありそうですね。今も素敵ですけど……」

写真を見つめながら思つていたことがぼろつと口から零れる。すると、何故か向井さんが驚いたような顔をして「えっ」と声を上げた。

「漆瀬さんがそんなこと言うなんて、珍しいわね」

「そうですね？ でも、本当に素敵だと思つたんで……」

向井さんは不思議そうな顔をして、手元の社内報に視線を落とす。

「確かに斎賀さんつて、イケメンだし長身だしモテる要素はばっちりなんだけど、なんせ仕事以外で人と関わらないから。むしろ、いつも無表情でそれが怒つているように見えるせいか、女性からの人気はないみたいなのよね……」

「……え？ 斎賀さんがですか？」

あのルックスで人気がないだなんて、にわかに信じがたい。

「うん。でも、できる人には違いないだけどね」

「そうなんですか……」

向井さんがマグカップに入ったお茶を飲み、話を続けた。

「本社から異動になつちゃつた間のことは知らないけど、前よりもぴりついた感じはなくなつたかも。もしかしたら異動先での仕事は大変だったのかもしれないわね」

向井さんの話を聞きながら、社内報の中の齋賀さんを見つめる。

——無表情……でも、怒っているようには見えないけど……

私はこの前の、数メートルだけ齋賀さんと並んで歩いた時のことを思い出す。

確かに口数は少なかったが、言葉の端々に気遣いを感じた。だから私も、一緒に歩いていて変に構えることもなかったのだ。

それだけで判断するのは難しいかもしれないけど、決して怖い人ではなかった。むしろ、いい人だと思う。

この時の私は、齋賀さんに対してそんな印象を抱いていた。

それから数日後。昼休みを狙って、上松さんが私の元へやって来た。

両手いっぱい紙袋を携えて。

「漆瀬さん！ 数日ぶりです!! お元気でしたか」

「元気です……。それよりも、上松さんその荷物は……?」

彼の手にある紙袋へ視線を移すと、それに気がついた上松さんの顔がパツと明るくなる。

「あ、これはお土産です。出張で名古屋に行っていたので、名物を買って来ました。この中に漆瀬さんの好きなものがあればいいなと……」

ガサガサと紙袋から買ってきた物を見せようとする上松さんに、私は慌てて待ったをかけた。

「あの！ それよりもお話があるんです。ちょっといいですか?」

「もしかして、この前保留した話の続きですか?」

ズバリ言われて、私は周囲を見回し、近くに誰もいないことを確認してから頷いた。

「すみません……私、あなたとお付き合いはできません。ですので、こういったことは困ります」

「うわ、また振られた。俺、この短期間で二回も振られますね」

応えているのかいないのか。まったくその表情からは読み取ることができない。

「……じゃあ、教えてくださいよ。漆瀬さんはどういった男性ならお付き合いするんです?」

「え?」

上松さんは私の横をスタスタと歩いて行き、デスクの上に紙袋を置いた。

「聞きましたよ。漆瀬さん、入社以来何人にも告げられているのに、誰とも付き合わないって。それは何故なんですか? もしかして、もう決まった人でもいるんですか? 婚約者とか」

私のデスクに片手をつきながら、上松さんが尋ねてくる。その目はこれまで見たことがないくらい、感情が籠もっていない。

初めて見る人のようで、少し怖く感じた。

「そ……そんな人は、いません」

「じゃあ、好みの人ってどんなタイプなんです? アレですか、御曹司みたいな金持ちじゃないと相手として見ないってことですか? ただの平社員にはまったく気持ち動かない?」

小馬鹿にしたような物言いに、全身から血の気が引いていく。

——私は今、何を言われて……

「そんなことはありません！ 私は肩書きで相手を見たりなんかしません」

「じゃあ、俺でもいいじゃないですか。今は好きじゃなくても構いません。ものは試して付き合ってくださいよ。そうすれば、そのうち気持ちも動くはずですよ。いえ、動かしてみせますから」

上松さんはきつと自信があるのだろう。だけど、私の心は動かない。それどころか、どんどん気持ちが離れていくのが手に取るように分かる。

——やっぱり私、この人無理……！

「無理です。ごめんさい」

もう一度お断りしたら、上松さんの表情が曇った。

「……漆瀬さんは、俺を馬鹿にしている？」

いきなりこんなことを言われて、口がポカンと開いてしまう。

「何を言って……」

「だってそうでしょう？ 俺がこんなに頼んでいるのに、まったく考える素振りも見せずにすぐ断る。まるで端からお前なんかお呼びじゃないって感じで、取り付く島もない。せめてもう少し考える姿勢を見せてくれたってよくないですか」

「姿勢って……付き合う気持ちがないのにそんな気を持たせるようなことできません！ そっちの方が相手に対して失礼じゃないですか」

正直な気持ちを伝えたつもりだった。なのに、反論するように間髪容れずに言葉が返ってくる。

「いいえ、俺にとつては今の方が残酷ですね。恋人になる以前に、男としても見てもらえていない。こんなのひどすぎますよ。きつとあなたみたいにモテる女性には分からないでしょうけど」

吐き捨てるように言われた言葉がぐさりと胸に刺さる。

「あなたみたいな人、好きになつて時間の無駄でした」

ただでさえシヨックを受けていたところに、ダメ押しの一言を食らう。それは、想像以上に私の心を抉っていた。

——時間の……無駄……

呆然としていると、今まで見たこともないような冷たい表情で、上松さんが口を開く。

「こんなもん俺いららないんで、差し上げます。いらなかったら捨ててください」

そう言うなり、上松さんが私の横を通り過ぎる。すれ違いざま、肩にドン！ と彼の二の腕がぶつかったが、上松さんは何も言わずに部署を出て行った。

「いたっ……」

ぶつかった衝撃で顔をしかめる。だけどそれ以上に、彼の言葉が私の心を傷つけていた。そのせいで、この場から一歩も動くことができない。

「あれ？ 今、上松さんとすれ違ったけど。もしかして来てたの？」

コンビニに昼食を買いに行っていた向井さんが戻ってきた。彼女は買ってきた昼食をデスクに置くと、すぐに私のデスクにある紙袋の存在に気がついたようだった。

「あら、何これ？ 名古屋名物……いろいろ？ もしかしてこれって上松さんのおみや……」

げっ!？」

向井さんが驚き、私を見て固まった。

「漆瀬さん……!! 何があったの……!!？」

「え……?」

慌てて駆け寄ってきた向井さんが、私をその胸に引き寄せ抱き締めた。彼女の温もりに包み込まれた途端、気が緩んだせいか目に涙が溢れてくる。

——やばい、泣きそう……

向井さんに何があったのか説明しようとしたけど、上手く言葉が出てこない。

「上松ね? 上松がなんか言ったのね!？」

私を強く抱き締めながら背中を摩つてくれる。向井さんの声音には怒りが含まれていた。

——どうしよう、向井さん怒ってる。

確かに上松さんが原因ではあるけれど、これ以上、事を荒立てたくない。

「だ、大丈夫です。ごめんさい……」

向井さんの胸から顔を上げると、いつのまにか近くに部長が来ていた。ずっと自分の席にいた部長は、話の内容は分からないまでも私と上松さんのやりとりを一部始終見ていたのかもしれない。

——うっ……恥ずかしい。あんなの見られてたなんて……

「漆瀬さん、まだ休憩時間あるから、どこかで休んでおいで。そんな顔をしていたら昼食を食べて戻ってきた社員達がびつくりするから」

「うん、そうね……その方がいいわね」

部長の提案に、向井さんも同意した。私は向井さんから離れ、目元を拭いながら二人に頭を下げる。

「すみません……少しだけ、席を外します……」

心配そうに見守る向井さんと部長に軽く会釈をしてから、私は部署を出て外に向かった。

【あなたみたいなの、好きになつて時間の無駄でした】

こんなこと、人生で初めて言われた。

誠実に気持ちを伝えたくもりだったけど、言い方を間違えてしまったのか?

じゃあ彼に言われるまま付き合えばよかったのか? でも、好きでもないのに付き合ったら、それこそ残酷ではないのか?

試しにお付き合いをして、やっぱり好きになれなかった時はどうするのだ。

自分を偽ったまま相手と一緒に居続けるのは、相手に対して失礼だし、それこそ、時間の無駄ではないのか。

——本当の気持ちを話したただけなのに、なんであんなことを言われなさいいけないの……?

歩きながら悶々としていたら、またじわりと涙が浮かんでくる。どうやら、完全に涙腺を刺激するスイッチが入ってしまったらしい。

——いい年して泣くな。みっともない。

すれ違う人に見られないよう、俯いたまま外を目指す。そんな時に限って、タイミング悪く声を

かけられた。

「漆瀬さん」

聞き覚えのある低音に小さく胸が跳ねた。控えめに顔をそちらに向けると、正面から齋賀さんが歩いてきた。おそろく、外で食事を済ませて戻ってきたところだろう。

齋賀さんは私の顔を見るなり、驚いたように目を見開いた。

「どうしたんですか」

そう言いながら、私のすぐ近くまで歩み寄ってきた。

どうしたと言われても、すぐに事情を説明することなど、今の私にはできない。

「なんでもありません、大丈夫です」

声もいつもより出ていないし、齋賀さんと再び目を合わせることもできない。これでは何かあったと一目瞭然(いちもくりょうぜん)だろう。

——気まずい……

「すみません、急ぐので……」

会釈(えしゃく)をしながら齋賀さんの隣を通り過ぎようとした。しかし、咄嗟(とつさ)に「ちょっと待って」と呼び止められてしまう。

「そんな状態でどこに行こうっていうんだ」

これまでのような落ち着いた丁寧さはなく、素の感情を表に出したような齋賀さんに戸惑う。

——齋賀さん、なんだかいつもと違う……

焦りのようなものが浮かぶ齋賀さんと目を合わせ、私は小さく首を横に振った。

「いやあの……少し外の空気を吸って気持ち落ち着けようと思って。だから……失礼します」

齋賀さんの視線から逃れるように顔を背(そむ)けた。そのままこの場を去ろうとしたら、手首を優しく掴まれた。

「待って。今の君は一人でいると余計に目立つ。——おいで」

「えっ……？ あ、あの……」

戸惑う私に構わず、私の手首を掴んだ齋賀さんが、来た道に戻り始めた。

——どこへ行くの？ っていうか、なんで齋賀さんまで？

手首を掴まれて一緒に歩いているところなど人に見られたら、またどう思われるか分からない。

彼の背中を見ながらそんな不安を抱いていると、正面から人が歩いてくるのが見えた途端、私の手を掴んでいた齋賀さんの手が離れた。

「すぐそのコンビニに行くだけだから」

「は……はい」

連れだつて社屋を出た私達は、道路を挟んで向かいにあるコンビニに入った。

「どうぞ」

「ありがとうございます……」

何を飲むか聞かれて、真っ先に目に入ったカフェオレと答える。すると、彼がカフェオレと自分のコーヒーを買ってくれた。店を出て、コンビニの壁に凭(もた)れながら、二人並んで立ったままそれ

を飲んだ。

齋賀さんが買ってくれたのは、私もよく飲むごく普通のカフェオレ。なのに、今日のカフェオレはやけに心に沁しみだ。

——美味おいしいなあ、このカフェオレ。こんなに美味おいしかったつけ。

ほう……と息を吐き出していたら、コーヒーを飲んでいた齋賀さんが、こちらを見ないまま話しかけてきた。

「少しは落ち着いた？」

「はい……」

「原因は上松だろう」

いきなり言い当てられてしまい、ため息をつく。

「はい……」

「……あいつに何を言われた？」

そこまで分かっているのなら、話してもいいかという気になった。

「……もう一度ちゃんと、お付き合いをお断りしたんですけど、私の言い方がよくなかったのか、上松さんの気分を損ねてしまつて……ちよつと……言われたことがショックだったというか……」
恥はずかしくて、視線を手元のカップに落とす。

二十八にもなつて人前で泣くなんてみともない。しかも、たまたま通りかかった齋賀さんに心配までかけて、私は一体何をやっているのか。

考えれば考えるほどやるせなくなる。

「……上松は、今まで女性に振られたことがないそうだ」

「え？」

いきなりそう切り出した齋賀さんを見上げる。

「おそらく上松は、漆瀬さんが自分を断るはずがないと思ひ込んでいたんだろう。でも、振られた。それが上松にとつては受け入れがたいことだったんだろう。だから、思わず君に怒りをぶつけた……つてとこかな」

「あんなに無理ですつて言っていたのに、どうして私が断るはずがないなんて思ひ込めるんですよ……」

「周囲がちやほやしすぎなんだろう。あれじゃ天狗てんぐになつても仕方がない。今回のことは、これまで自信满满しんまんだった上松の鼻が折れて、むしろよかつたんじゃないか」

涼しい顔で紙コップに口を付ける齋賀さんを見つめ、私はまたため息をついた。

「でも……私、彼を傷つけてしまいました」

「君が傷つくよりはいい」

間髪かんぱ容れず返ってきた言葉に、また齋賀さんを見上げた。それに気づいた齋賀さんも、顔をこちらに向けてきた。

「ん？」

「いえ、あの……同じ部署でもない私に、なんでそんなことを言ってくれるんだろうって思っ

て……」

「あんな泣きそうな顔で歩いていたら放っておけないだろう。その原因が自分の部下なら、余計だ」

齋賀さんは残っていたコーヒーをぐいっと呷った。空になった紙コップをゴミ箱に入れ、私の隣に戻ってくる。

「……涙はもう引つ込んだ？」

齋賀さんが、少し腰を屈めて私の顔を覗き込んできた。その顔があまりにも綺麗だったので、ドキッとする。あと、近すぎる距離にも。

「は……はい、大丈夫、だと思えます……」

「でもまだ目が赤いな」

じっと目を見つめられると、どこを見ていいか分からない。私はたまたま一歩後ろに下がった。

「……か、花粉症で誤魔化します……」

こう言ったら、齋賀さんが腰を屈めたまま「あ」という顔をする。

「なるほど。そういう手があったか」

体勢を戻し口元に手を当てながら、真顔で納得している。そんな齋賀さんがなんだか可笑しくて、笑いが込み上げてきた。

「そんな真剣に言い訳を考えなくても……」

でも相手は先輩社員。笑っちゃいけないと思い必死で笑いを堪える。そんな私を黙って見つめて

いた齋賀さんの表情が、少しだけ柔らかくなった。

「笑顔の方がいいよ、漆瀬さん」

齋賀さんの口から、彼が発したとは思えない言葉が紡がれた。

「……え？」

「そろそろ昼休みが終わる。行こうか」

ぽかんとする私にちらつと視線を送って齋賀さんが歩き出す。慌ててカフェラテのカップを持ってたまま彼を追いかけた。

社屋の正面玄関からエントランスに入る寸前、齋賀さんが立ち止まって私を振り返った。

「前も言ったと思うけど、上松のことで何か困ったら遠慮なく相談して」

眼鏡の奥にある切れ長の瞳が、困った時は頼れと言っている。

「きつと……もう大丈夫だと思えます。私のことなんか嫌いになったみたいですし。それに、彼の上司である齋賀さんに相談するのはちよつと……言いつけるみたいじゃないですか」

上目遣いで齋賀さんを窺うと、何故か彼は、ふいっと視線を逸らしてしまう。

「上司として当然のことだ。上松は、はっきり言わないと気づかないことも多いから。漆瀬さんが心配するようなことは何もないよ」

「でも」

躊躇っている、齋賀さんが胸ポケットからカードケースを取り出し、そこからカードを一枚抜いて私の手に握らせた。

「いつでも構わないから」

さらりと言い放ち、齋賀さんはエントランスの奥へ消えていった。彼が去って行くのをじっと見守つてから、手の中にあるカードへ視線を落とす。それは、齋賀さんの名刺だった。よく見れば携帯電話の番号も記載されている。

名刺に記載されている名前は、齋賀陣^じ。

私は部署に戻るまで、ずっとその名前を頭に思い浮かべていた。

その日、仕事を終えた私は、上松さんが置いていったたつぷりお土産^{みやげ}の入った紙袋を持って、企画開発部に向かった。

いらなかったら捨ててくれ、なんて言われたけど、そんなことできるわけがない。

かといって、あんなことを言われた相手からもらったものを、何食わぬ顔で持って帰れるほど私は強心臓ではない。

——もしかしたら、またキレられるかもしれないけど……それでも、もらったままにいるよりは返してスッキリした方がまし。

企画開発部で最初に会った女性社員に上松さんのことを聞いたら、その女性がフロアの奥の方にいた上松さんを呼びに行つてくれた。それを目で追っていると、何気にすぐ近くには齋賀さんの姿もあった。

いつもの無表情で、パソコンの画面に見入つていた齋賀さんは、上松さんが私の存在に気がつく

と同時に顔を上げた。

——あ。こっち見た……

齋賀さんと視線がぶつかったことで、何故か私の胸がドキドキ音を立て始める。そのことに動揺していると、眼前にもものすごく焦つた様子の上松さんが早足で近づいてきた。その勢いに、思わずビクツと体が震える。

また何か言われるかもしれない、と無意識に身構えていたら、いきなり頭を下げられた。

「……っ、すみませんでした！」

「え」

「……いくらあなたに振られて苛ついていたらとはいえ、ひどいことを言ってしまった。本当に申し訳ありませんでした」

まるで昼とは別人のような上松さんに、なんだか狐につままれたような、変な気分になる。

「上松さん、昼はあんなに怒っていたのに」

体を戻した上松さんが、申し訳なさそうに視線を泳がせる。

「いやその……あの後、少し冷静になったところで上司からたまたますれ違ったあなたが泣いていたと聞いて……自分の言動を思い返してみたんです。さすがに、あれはひどかったと……思つて……」

上司というのは、齋賀さんのことだろう。

ちらつと齋賀さんの方へ視線を向けると、一瞬目が合ったのにすぐ逸らされてしまった。

——大丈夫だって言ったのにな……

それでも、こんな風の上松さんから謝罪してもらえたのは、斎賀さんのおかげかもしれない。素直にありがたく思った。

「そうですね。私も上松さんのことを深く知ろうともせず、一方的に拒絶するような態度を取ってしまったので。ご気分を害されるのも無理ありません」

これに対し、急に上松さんの表情が明るくなる。

「え……じゃあ付き合ってくれるんですか？」

「いいえ。それは絶対に無理です。それとこれ、やっぱりお返しします」

お土産の入った紙袋を彼に返すと、上松さんの表情が分かりやすく曇り、そのままがつくりと項垂れてしまった。

「まあ、そうですね……」

紙袋を胸に抱えている上松さんが、これまでと違って小さく見える。

その姿を見ているうちに、あまりのギャップに笑いが込み上げてきた。

「ふふっ……ほんと、上松さん昼と別人すぎます」

申し訳ないけど声を上げ笑ってしまった。すると、何故か上松さんが、私を見たまま顔を赤らめた。しかも気のせいなのか、体が微かに震えているような気もする。

——あれっ？　なんで顔赤い……もしかして笑ったことに怒ったのかな。

「すみません、私——」

慌てて笑うのをやめると、上松さんが紙袋を両手に抱えたまま、私に一步近づいた。そして彼は、天井に向かって声を張り上げる。

「漆瀬さああん!! やっぱ好きだああああ!!」

「えっ!? えええ!?!」

真っ赤な顔でいきなり叫んだ上松さんに、部署に残っていた社員の視線が一気に集まる。

その中には、もちろん斎賀さんの視線も含まれていた。斎賀さんは、目を見開いたまま私を見た後、額に手を当て項垂れてしまった。

——さ……斎賀さん……どうでしょう……

きっぱりお断りしたのに、今度はこんな場所で愛を叫ばれてしまった。

結局上松さんのことは、今日ですっきり終わり……とはいかなかったのだった。

翌日出勤すると、やっぱりというか案の定というか、いつも以上に視線が痛かった。特に上松さんが叫んだ現場を、その場で目撃した企画開発部の女性からは、かなり冷ややかな視線を浴びせられる。

「告白されるのはいいけど、さすがに場所をわきまえて欲しいわよね」

「そうよね。やるんだったら誰もいない場所で二人きりでやってほしいわ。それにしても、上松君にはがっかりよ。やっぱ顔なんだね」

エレベーター待ちをしている間、企画開発部の女性二人が背後でわざと私に聞こえるようなボ

リユームで話している。その一言一句が針のようにチクチクと私の背中に刺さってきた。

——いや私、ちゃんと断ってるし……どうすりゃよかったのよ……

昨日、企画開発部で再び告白してきた上松さんは、駆けつけた斎賀さんを含めた同僚に取り押さえられた。

『漆瀬さん、もう行っていいよ』

斎賀さんに言われて、私は急いで『すみません、失礼します！』と挨拶をして、企画開発部を後にした。

結果として、上松さんと仲直りをしたことはよかったのか、悪かったのか。

いまだ背後で、私に対する当てつけのように文句を言い続けている女性二人に嫌気がさし、エレベーターに乗るのを諦めた。

人氣が少ない階段で三階にある部署へ向かおうとすると、背後に人の気配を感じた。

——まさか上松さん!?

勢いよく振り返ったら、後ろにいたのは斎賀さんだった。

「あ……斎賀さん。おはようございます」

「おはよう」

斎賀さんの顔を見た瞬間、自分でもびつくりするくらい安心して気が抜けた。

いつもと変わらぬシルバークレームの眼鏡に、綺麗に整えられた髪。それと、耳馴染みのいい低い声。しかも斎賀さん、いい匂いがする。

いい匂いをさせた斎賀さんは、私の隣に來ると、いきなり謝ってきた。

「昨日は上松が申し訳なかった。漆瀬さんには気まずい思いばかりさせてしまって、なんとお詫びしたらいいの？」

斎賀さんは、本当に申し訳なさそうに目を伏せている。彼は、何も悪くないのに、だ。

そんな顔を見たら、こちらの方が申し訳なくなってきた。

「いえ、斎賀さんは何も悪くありません。だから、そんな顔なさらなくてください。上松さんは、なんというか、ああいう人なんだなって昨日一日でよく分かりましたし……もう、いいです。今後は何を言われても、きっぱりお断りしますから」

彼を安心させようと、努めて明るく振る舞った。だけど斎賀さんの表情は晴れない。

「いや、上松だけじゃないだろう。さっきエレベーターの前で、君の話をしている社員がいたようだし」

「ああ……」

「あまりにひどいようなら、何か手を考える」

今の一言で、さっきの嫌な気持ちを全部チャラにできた。

「ありがとうございます。そうやって、ちゃんと分かってくれている人がいると分かっただけで、私は大丈夫です。だからもう、気になさらないでください」

私の言った内容が理解できないのか、斎賀さんが困り顔で見下ろしてきた。

「恥ずかしながら、私、わりと周囲に誤解されやすいみたいで、こういうことがよくあるんです。

だから、本当に気にしないでください」

「こんなことがよくあるのか」

「ええ、まあ……すみません……」

恥ずかしいと思っていると、斎賀さんがため息をついた。

「……昨日渡した名刺、今持ってる？」

階段をゆっくり一段ずつ上りながら、斎賀さんが私に尋ねてくる。

「はい、持ってますけど」

「ちよつと貸してもらっていいかな」

「？ はい」

なんだかよく分からないけど、言われるまま、スマホケースのカードホルダーに入っていた斎賀さんの名刺を渡した。

彼はそれを手にすると、胸ポケットからペンを取り出し、さらさらと何か書いていく。

「よく考えたら電話番号だけしか書いてなかった。業務以外のことを電話で連絡っていうのは、ハードルが高いように思うので、SNSのIDを書いておいた。緊急の連絡があれば、ここに送って」

ペンを胸ポケットにしまいながら、斎賀さんが名刺を私に戻してくる。裏面に手書きで書かれたIDを見た瞬間、私の胸が苦しいくらい締め付けられた。

「あ……ありがとうございます。休憩時間に早速登録しておきます」

「よろしく。あと、君、上松の前であまり笑顔を見せない方がいい」

「へ？ どうして……」

「ものすごく可愛いから。あれだと上松にとっては逆効果」

気がついたら私の部署がある三階に到着していた。

斎賀さんが勤務する企画開発部は四階にあるので、彼は私にちらつと視線を送ると、そのまま大股で階段を上っていった。

その足の長さに驚く以上に、私の頭は別のことでいっぱい、その場から動けなくなった。

——今……笑顔が可愛いって言った？ しかもものすごく……

言われた内容を頭が理解した途端、嘘みたいに顔が熱くなってきた。呼吸が浅くなる。

いや、あれは気をつけるように教えてくれただけだ。きっと深い意味なんてないはず。だけど、どうしても体が熱くなるのを止められない。

正直に言う、これまでも人から可愛いと言われたことは結構ある。

けれど、男性にそう言われて、ここまで動揺したのは人生で初めてだった。

思い出したら、心臓があり得ないほどドキドキして、足に力が入らなくなる。

私は胸に手を当てたまま、彼が上っていった階段をただ見つめていた。

昼休み。利用しているSNSに斎賀さんのIDを登録して数時間後。

先に【よろしくお願ひします】と送っておいたら、ちゃんと既読がついていた。